

Ⅲ ブロック活動編

1 縦学年の教室配列の為、同学年の友達ができにくいんだけど。

標記の「同学年の友達ができにくい」という声は、同じ学年なのに教室が離れている大口中学校の教室配列から生まれるものです。生徒間から、時には、保護者間から、「同学年お友達と交流が図りにくい」と聞くことがあります。また、教員からも、学年単位の指導ができにくい、という声があがり、この教室配列の問題は、開校以来から現在に至るまで議論が続いています。実際、開校3年目となる平成23年度には、学年並びの教室配列にしたことがあります。

平成30年度の大口中学校の教室配置図は、次ページに掲載する通りです。

「縦学年の教室配列」とは、例えば、1年生・2年生・3年生の「1組」をAブロックとして、3階北館の社会科フロアに3つの学級を横並びに配列していることを指します。3年1組がブロックのリーダー的役割をもって、両隣の2年1組、1年1組を導くというねらいをもった配置です。

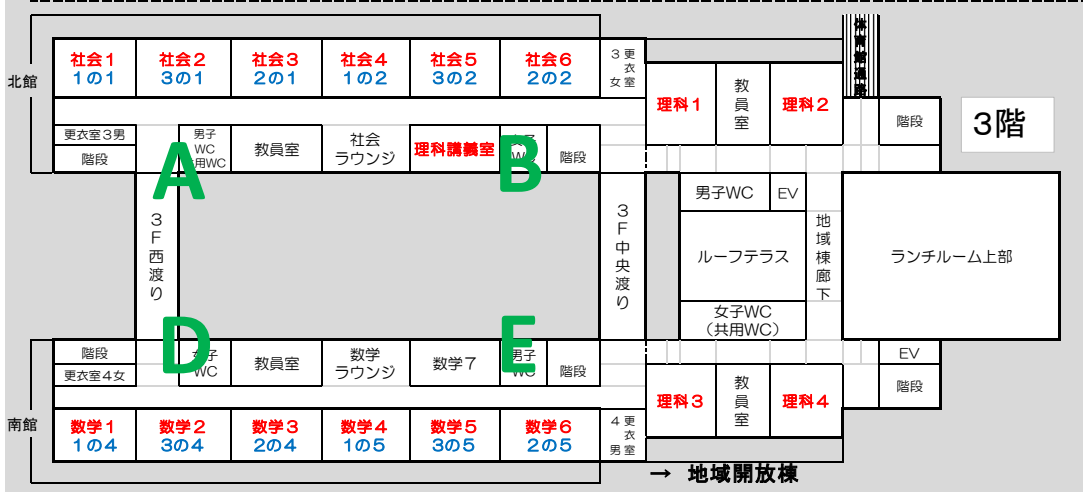
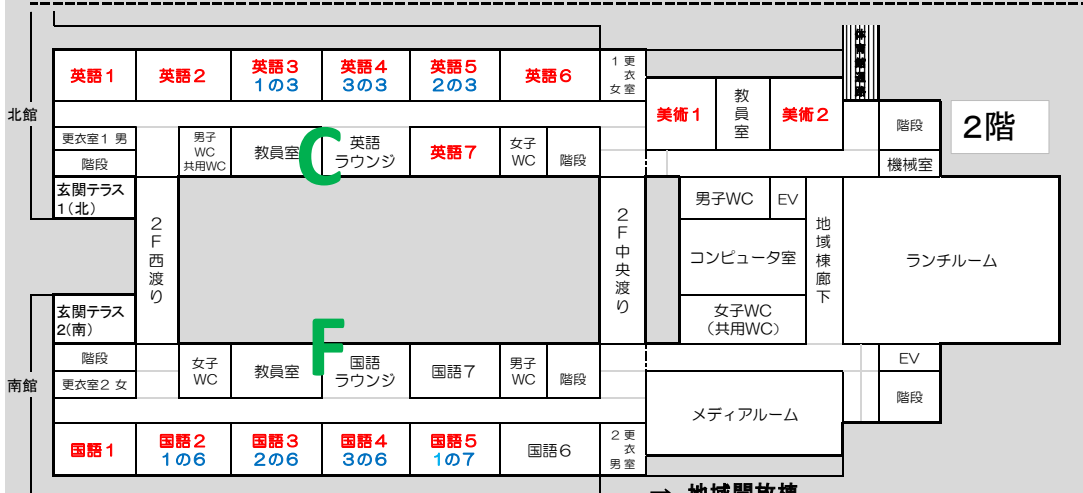
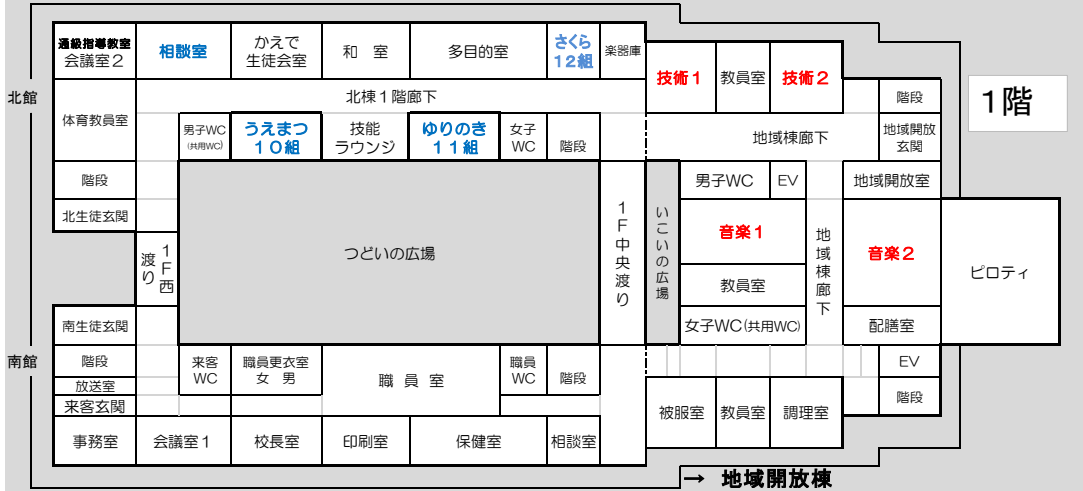
一方、一般的な学校では、例えば3階のフロアは、3年1組から2組・3組・・・と、2階フロアには2年生の全学級が、というように、同じ学年が一並びに配列されています。おそらく保護者にとっても、ご自身の中学生時代もこのような教室配列だったと思います。

しかしながら、大口中学校が、これからの社会を生き抜く必要な資質や能力を育てるために、教科センター方式のもとに学校運営をしていこうとした時、従来の学校運営の“常識”を拭い取り、新たな発想で手段を講じることが求められます。そして、開校時の議論の中で生まれたのが、「異学年交流」という考え方であり、(このことについては、第2章Ⅰ生活編4参照)その手段として「ブロック活動」が生まれ、これを具現化するための手立てとして、縦学年の教室配列(ブロックごとの教室配列)の発想が生まれました。現在の教室配列はこのような考え方のもとにある訳です。

さて、「同学年の友達を作りたい」という思いは、生徒の必然の願いであります。ですので、現在の教室配列であろうと、この思いが叶うよう学校は学年経営に留意すべきです。その上で、現在の教室配列の環境を十分に生かしてブロック活動の推進に取り組み、共に生きる「共生」の精神を持った生徒を育てなければなりません。

教室配置図

Aブロック	Bブロック	Cブロック	Dブロック	Eブロック	Fブロック
3年1組 2年1組 1年1組	3年2組 2年2組 1年2組	3年3組 2年3組 1年3組	3年4組 2年4組 1年4組	3年5組 2年5組 1年5組	3年6組 2年6組 1年6組 1年7組



2 先輩が怖いんだけど。

中学校になると、「先輩」という言葉が、日常生活の中で使われるようになります。中学校時代に出会った先輩から、いろいろなことを学んだであろうことは、誰もが共有する経験なのではないかと思います。

さて、大人になり私たちが過ごす社会は、全て異学年集団です。人は、中学校を経て進学や就職をしたり、様々なコミュニティに所属したりする中で、多様な人と関わり人間関係を学んでいきます。

大口中学校では、学校の日常生活の中に、異学年交流の場が生まれる仕組みになっています。怖いけれど優しい人もいます。大口中学校の生徒には、こうした環境の中で、多様な他者から学びを得て、自らの力に代えていってほしいと期待しています。

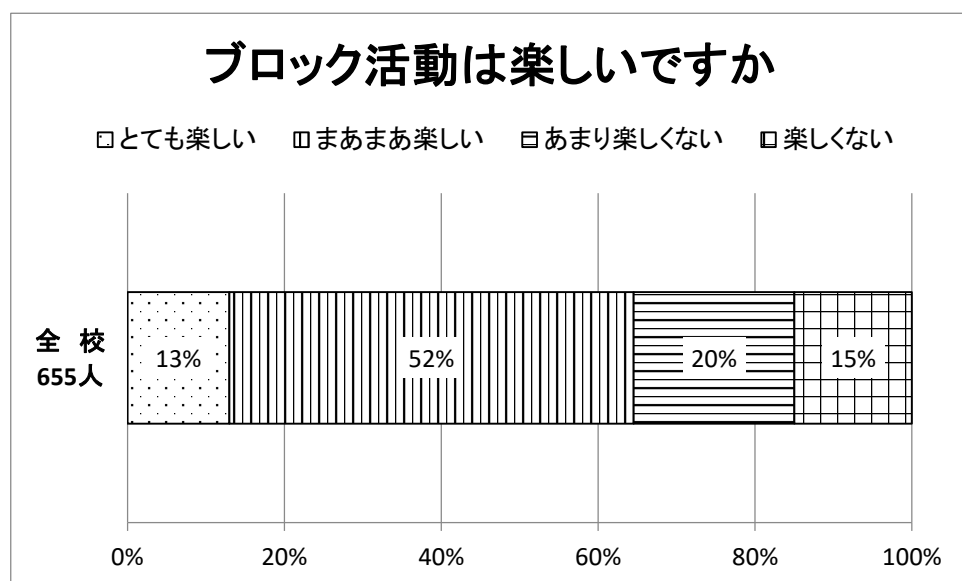
3 ブロック活動って、何やっているの？

ブロック活動は、ともすると他校で行っている“縦割り活動”と同じようにとらえられている場合があります。例えば、体育大会での応援合戦で、1年1組と2年1組と3年1組が合同して行うことは、他校でも行われています。

一方、大口中学校のブロック活動は、体育大会のような学校行事の時だけでなく、年間を通して日常的に取り組みられています。例えば、清掃活動や給食活動も、異学年で一つのグループを組んで取り組みます。また、ブロックごとに学校生活をよりよくするためにはどうしたらよいのか、主体的に問題を見出し、課題解決や改善活動に取り組むプロジェクトを行っています。このプロジェクト活動は、毎年の生徒総会で取組の説明と成果の発表があり、1年1年、その活動レベルは上がっています。

こうした諸活動が日常的に成り立つのは、先に触れたブロックごとの教室配置等の手立てにより日常的な人間関係が成立し、3年生が両隣の1年生と2年生を導くという構図が成り立っているからだと思います。

下記のアンケート結果は、6割を超える生徒がブロック活動を楽しいと感じていることを示しています。大口中学校の特色として、ブロック活動が多くの生徒に肯定的にとらえられていることが分かります。



4 ブロック活動の時間のせいで、授業の進度が遅れているんじゃない？

「授業の進度が遅れている」という指摘を受けたことがあります。進度が遅れる原因が、ブロック活動の時間のためかどうかについて、現在の教育環境をもとに述べたいと思います。

まず、授業は年間指導計画（カリキュラム）に則り進められます。1年間の授業時間数も、学習指導要領で定められ、どの学校においてもその基準が達成されるよう教育課程を設定しています。

大口中学校のブロック活動は、年間70時間ある「総合的な学習の時間」の一部を使って行っています。ですので、ブロック活動のために授業の進度が遅れることはありません。

一方、授業進度が問題になる背景には、平成20・21年度（2008・2009年）の学習指導要領の改訂があります。この改定で、教科書のページが増え、教科書が重くなったというニュース報道が社会的に話題になったところは記憶に新しいところであります。具体的には、国語、社会、数学、理科、英語、保健体育の授業時数が実質10%増加しました。教育内容量の増加です。

しかしながら、時間割は従来通りの週29コマに変わりありませんでした。総枠の授業時間数は同じなのに、各教科の授業時間数が増えている。つまり、カリキュラムに、いわゆる“余白”がなくなっている現実がある訳です。

授業は計画通りには進まないこともあります。生徒の理解状況を確認しながら場合によっては反復したり、より興味関心を高めるために計画時間以上に学習活動を増やしたりすることがあります。また、時には教師が生徒に何かについて話すという時間も、以前はあったものでした。

平成32・33年度（2020・2021）には、さらなる学習指導要領の改定が待ち受けています。これは中学校の授業時数には変動がありませんが、小学校では教科「外国語」が新設され、年間の授業時間数が、現行（50時間）から20時間増の70時間になります。小学校にも教育内容量の増加があることがこの改訂の特色です。

このような背景の中、ブロック活動を含め、どのような教育課程を設計し、これをどのような時間割で行っていくのが、子供たちにとってよいのか、議論しなければならない時期に来ていると考えます。

5 ブロック宿泊研修って、1泊する意味があるの？日帰りでもいいんじゃない？

平成27年度のブロック宿泊研修が、台風の接近により出発できず、翌日、日帰り行程で実施したことがあります。この時は、急な行程変更にもかかわらず、何とか日帰りでも実施したいと対応に尽力した教職員、そして、生徒の柔軟な対応力のお陰で実現にこぎつけることができました。日帰り日程でもそれなりに充実感も得られた様子から、標記のような声が凶らずもあがってきた経緯があります。

さて、ブロック宿泊研修とは、タイトルの通り1年生・2年生・3年生から成る異学年集団で宿泊して24時間の時間を共有するという行事です。このような取組は他校ではありません。なぜなら、“不可能”だからです。日常的に異学年集団で日常の学校生活を共にする大口中学校だから“できる”ものです。

そして、その大口中学校でも、最初から宿泊研修の実現ができたわけではありません。ブロック活動は開校1年目から始めましたが、その活動内容は一つ一つ創り上げる過程そのものでした。そして、開校して4年が経つ平成24年度、ブロック活動として積み上げてきた成果を発揮する場として、宿泊研修が行われました。

ブロック宿泊研修は、大口中学校の“挑戦”なのです。異学年で宿泊行事ができること自体が、大口中学校の力であり、“伝統”であると捉えています。

大口中学校は10年という歴史の中で、「伝統」を1年1年確実に築いてきました。卒業式では、先輩から後輩へ、後輩から先輩へ、感謝の気持ちを述べる感動的な姿に出会います。このような思いが共有できるのは、大口中学校の生徒一人一人が、「ゴール」のイメージを「共有」しているからだと思います。例えば合唱コンクールではどのような歌声を響かせるとよいのか、協力するとはどのようなことなのかなど、生徒はよく知っています。なぜなら、先輩たちの姿を見てそのイメージを築いているからです。これが「伝統」の力だと思いません。

ブロック活動によって10年という月日のうちに育まれた「伝統」の力は、きっと、これからの中生を支える力になるものと期待しています。

6 ブロック活動に時間をかけているけど、意味あるの？

ブロック活動は、「異学年集団で行う自治的活動」として開校当時から取り組んできました。その中で、学校生活の多様な場面において、異学年交流を取り入れ、活動の幅を広げてきました。

そのような中で生まれてきた課題が、「ブロック活動を通して、生徒にどのような力を身に付けさせようとしているのか」というものです。そして、このような課題意識の中、大口中学校が平成25年度から設定したものが、「A・T・T」という汎用的能力の設定です。（詳しくは、資料編 p.55参照）

このATTとは、経済産業省によって「社会人基礎力」として提唱されたものを、大口中学校独自に応用して設定しました。ATTの、

A（アクション）は、「前に踏み出す力」

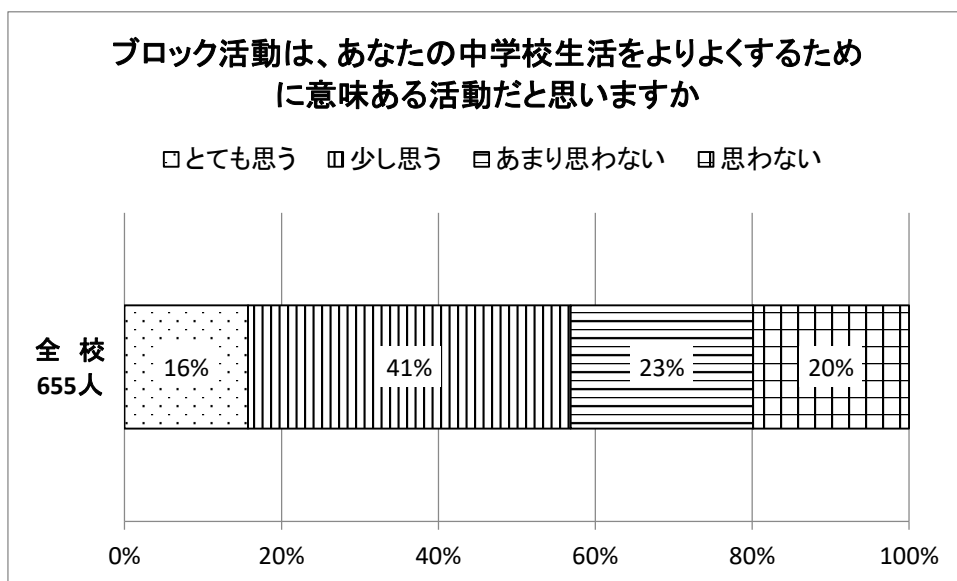
T（シンキング）は、「考え抜く力」

T（チームワーク）は、「チームで働く力」

の、3つの能力を指しており、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」とされています。この3つの能力を、ブロック活動を通して身に付けていくことが、大口中学校生徒の目標の一つとされています。

さて、このように文面にすると平坦なものに感じられるところがありますが、その意味内容は、とても難しく、とても大切なものです。

大口中学校では、一人一人の生徒が、自分の人生に生じる様々な課題に対して主体者（自分の意思をもって）として行動を選択し、あきらめることなく希望をもって考え抜き、他者と力を合わせることができる力を育むために、ブロック活動を行っています。



(このページ余白)